

やがて暗澹

福島泰樹



著者略歴

福島泰樹（ふくしまやすき）

1943年 東京に生まれる

1967年 早稲田大学文学部西洋哲学科卒

現住所 東京都台東区下谷 2 丁目10-6

著書 歌集『バリケード・1966年2月』（新屋書房），
歌集『エチカ・1969年以降』（構造社），歌集
『晩秋挽歌』（草風社），歌集『転調哀傷歌』（国
文社），歌集『風に献ず』（国文社），歌集『退
嬰的恋歌に寄せて』（沖積舎），全歌集『遙かな
る朋へ』（沖積舎），評論集『抒情の光芒』（国
文社），歌集『夕暮』（草風社）

歌論集 やがて暗澹

2000円

昭和54年12月20日 初版発行

著 者 福 島 泰 樹

発行者 前 島 俣

印刷所 音 羽 整 版

製本所 並 木 製 本

発行所 東京都豊島区 国文社
南池袋1-17-3

©Yasuki Fukushima, 1979.

Printed in Japan

うがて暗澹

福島泰樹

やがて暗澹*目次

序にかえて

歌状況は挽歌の時代へ 8

一九七一年

詩と救済 14

急ぎ過ぎた方法の△確立▽ 17

絶望的詩歌彷徨の飢渴 20

前衛短歌十年後の軌跡 22

山河慟哭の詩心をめぐり 25

祭儀の復権を求めて 28

一九七二年

いま、一九七一年晩秋 32

星とならざる射手に捧げむ 46

一九七三年

言語的痙攣のない光景 54

羽田以降、言葉は白昼の暗黒に曝され 57

希薄で曖昧な世代意識 60

歴史的必然性の軌跡を問う 64

何処にいる樽見よ、隆 68

一九七四年

言葉に殺された岸上 72

前方へ向っての追憶 76

イツヒ・ロマンこそ歌の命だ 80

血の底のくらきかなかな 85

ハ残闘Vに自己を限定しつつ 89

魂を鞭打つ共通の苦悩 93

銀の憂愁 98

一九七五年

一人称詩型を逆手に 104

来し方に降る雪を想う 108

青春という時間の光芒 112

詩歌とは更なる未知との出会 117

ナイーブな感性が奏る朝の歌 121

エロスこそ、風化をこばむ最後の砦 126

いまはこれらの歌が胸を打つ 130

一九七六年

一途で剛直な韻律の雄叫び 136

更なる言語空間へ、ハ肉声Vの伝達を求めて 140

三月は別れの季節 144

紫陽花、そしてハ村Vの戸口へ 149

ハなせにVと発し、ハゆえにVと応う 156

定型をつき崩すもの 159

危機を演出する試み 163

一九七七年

歌え、現実の日照りに 166

ひとり喫む焰の紅茶 170

おのが抱るべき処をハ中央Vとせよ 175

歌は時間、荷造りも済んだ 180

父に戦死われに死刑の…… 184

歳月を越えてあるもの 189

一九七八年

沸騰する熱い祈り 192

ハ私Vの定立は可能か 196

永久革命者の悲哀 200

想えば、一九七〇年を境に 205

愛鷹山中絶叫を夢む 209

あおい水煙、風、ロマネスス 214

私領域へと降り積る雪 218

一九七九年

鮮烈な一首を 222

黄昏、六〇年代青春の歌 227

わが慟哭のカランドリエ 232

そして、夕暮は黄昏よりも暗く 238

あとがき 245

初出覚書 248

やがて暗澹

序にかえて

歌状況は挽歌の時代へ

歌状況は、挽歌の時代に來たつた、と言つたら唐突であらうか。だがすくなくらず私が注目する短歌前衛の多くが、七〇年を過ぎてこのかたへ挽歌をなすことによって、自らの活路を拓いてきたという事実を、見逃がすことは出来ないであらう。

去年の秋、私はへ歌状況は挽歌の時代に突入したと書いた。塚本邦雄『星餐図』を手にしたのは、それからまもなくしてのことであつた。へ悲しみ淋漓たれ男らに軍装の萌黄こそ死する日までの服喪の一首は、すでに愛誦するところのものであつたが、跋へ星餐の辞で氏は、へ集録作品制作期間中に、詳しくは昭和四十五年朱夏と晩秋に、一人の盟友と一人の先達が突如私の視界から姿を消したと述べ、へ一顆の荔枝一把の苦艾を餐卓に供し、この一卷を心からなる贖詩、誄歌として献じようといふと悲別の情を綴っている。贖詩は盟友岡井隆に、誄歌は三島由紀夫に捧げられたものであることは言うまでもない。

さて塚本邦雄とともに前衛短歌の旗頭・岡井隆はなぜに七〇年の夏、突然私たちの前から姿を消してしまつたのであらうか。いまになつて、へあけぼのの星を言葉にさしかえて唱うも今日をかぎりとし

やせむVの一首にこめられたなみなならぬ決意を、しみじみと会得する。ちなみにこの作品は△倫理的小品集V『現代短歌70』四九首中の最後を飾り、思潮社版『岡井隆歌集』では、△天河庭園集Vの冒頭に置かれている。

苦しみて坐れるものを捨て置きておのれ飯食む飽き足らうまで

予定して闘争をするおろかさの羨しかれども遠く離りつ

飯食いて寝れば戦はどこにある俺というこのこごれる脂

此処へ来よ此処へ 時間に殉いてうらぎれるだけうらぎりながら

曇り日の秋田を發ちて雨迅き酒田をすぎつころわななき

△倫理的小品集Vから引いてみた。これらの作品が發表されたのは、六九年十一月、秋、安保決戦のさ中であつた。また作品が制作されたのは六九年に入つてからのことであり、丁度、高橋和巳が京大闘争の中で△わが解体Vを書いたところと符号し、まことに興味深い、私の乱暴な物言いを許してもらえらるなら、△倫理的小品集Vこそは、六〇年安保敗北の晩秋に編まれた代表歌集『土地よ、痛みを負え』以降、氏が切り拓いてきた六〇年代短歌そのものへの問いかけであると同時に、自らの存在のありようを突き刺す自己否定・解体寸前の△喘ぎV声ではなかつたらうか。

そのことについて昨日、私は国学院短歌研究会の主催する△定型詩の可能性Vというテーマのシンポジウムに招かれ、△五四年、中城ふみ子『乳房喪失』に始まるいわゆる前衛短歌は、六〇年をピ

一クとし、以後十年の後退戦の後、岡井の「倫理的小品集」を最後に完全にその運動を終えたVと、断言的に述べてきた。かくして岡井隆は、六七年から七〇年に至る三年間の作品二五〇首余りを、第五歌集『天河庭園集』として刊行することなく、『岡井隆歌集』の中に暴力的に押しこめて、旅立ってゆくのである。

まことに△天河庭園集Vこそは、六七年十月羽田闘争以降の連続的街頭戦・陣地戦、なかんずく全共闘が提示した△自己否定Vの論理を受けとめつつ定型詩短歌を唯一絶対の武器として、政治状況を己の文学状況へと、文学状況を政治状況へと投げ返しつつ己の△状況Vへとコミットさせてゆく営為になかなかなかった。

△倫理的小品集Vにみせた妻まじい居直り振りこそ、七〇年へむけての、更には歌の訣れ、失踪まで自己を追いかまづにはいられたなかった、政治・文学・日常などという図式を越えた岡井隆の△状況Vにほかならなかった。であるから七〇年代の歌状況を△挽歌Vに追いこんだのは実は岡井隆、その人であったのである。

△天河庭園集Vから

政治的集団の居る北口を愛にみだれて過ぐと知らゆな

女来てするどくなじる夜半ながら霜ふかからめ二月の庭 きさらぎ

泥ふたたび水のおもてを和ぐころを迷うなよわが特急あずさ

ひきかえす小路の熱さ耳ばたのなんたる大声の夏雲雀めが こうじ

最近刊行された佐佐木幸綱の第二歌集『直立せよ一行の詩』も又、六〇年代死者や失踪した岡井隆への言問いをなして感動的であった。

死者の友へ捧げん俺にふさわしき一升の水一生の悔い

月光の坂のぼりつめ孤立せし君を行かしめしあやまち深し

あかねさすあわき朝あしたの日の光ひかりを負いて立てりと告げよやさしく

鐘が聞こえる 鐘つき男の生活をあまた君は想うというか

あの鐘の音は七〇年五月、その才能を惜しまれつつ不慮の死を遂げた歌人小野茂樹の葬送の、夕暮ちかき寺で多分、岡井隆も打ち鳴らしたであろう鐘の音ではなかっただろうか。そして月光の坂をのぼりつめた人こそ、かつて定型詩をもって月光革命を試みた岡井隆その人の姿ではなかっただろうか。

更に私の挽歌論を深めるべく作品を紹介したい。富士田元彦が「映像＋定型詩Ⅴ」という、より緊密なフレームを創造すべく発行した個人誌「雁」1号に載った、三枝昂之「やさしき志士達の世界へ」がそれである。八まみなみの岡井隆へ 赤軍の九人へ 地中海のカミュへⅤの序歌に始まる一連の作品を通して、三枝は、八六〇年代戦士Ⅴであった高橋和巳や岡井隆への熱い「送辞Ⅴ」の意を、八世界戦士Ⅴであるカミュやゲバラを彼岸に見据えつつ、志士たる父系の世界への心情を歌う。

口はやに送辞述しいつ銃もたず世界を通過せる志士のため

飛魚の翔ぶ十尺の海洋を父の世界のことと想いぬ

逃亡にちかきおとこの心情を千の言語ののち言わんかな

もつとも志士に遠き旅だちひらひらと情念のうらのうらさかのぼり

まことにへ逃亡Vこそは、逃亡者の内実とは裏腹に、私たちの情念を限りなく飛翔させずにはおかない。日航機ボーイング727機乗取りのニュースがテレビに写し出された瞬間、私の脳裡に梅内恒夫と滝田修の面影が過った。そして事実のおおよそをつかんだ時、ダレた日常の食卓にあって、己ではなく彼らに万感の想いを寄せている己の怯懦を恥ずかしく思った。挽歌、挽歌と語ってきたが、七〇年以降を、私も又浅間や、迦葉、榛名の山々、へ死して天上の星Vと語った遙かなる熱砂に想いを馳せることによって、からくも歌作を支えてきたのだ。第二歌集『エチカ・一九六九年以降』も又、還らざる朋へむけての呼びかけ語りかけであった。

再度言おう。歌状況は挽歌の時代に突入した。この詩型にとって宿命的ともいうべきへ私Vに短歌は再び出会った。言葉の氾濫の渦に溺れてへ志Vを喪失しようとしている時代に、短歌はなお一つのアンチ・テーゼたりうるか。

一九七一年

詩と救済

ときに暗澹として失意の底に沈むことがある。茶碗に酒を注ぎながら、ひとり呻くことがある。
「夜明は近い夜明は近い、などとなかば自嘲的に歌ってみたりすることがある。そんなとき酔い痴れた頭に、蓬髪の皺深き男の貌が浮び上がってくる。「しっかりせい」と私に言う。

曼珠沙華のするとき象夢^{かたち}にみしうちくだかれて秋ゆきぬべき

昭和十五年刊、坪野哲久第三歌集『桜』の中の一詩である。かつて塚本邦雄は、哲久論の決定版ともいふべき「坪野哲久論」において『桜』を氏の代表歌集としてあげ、更に『桜』中五首を選び、最後に曼珠沙華の一首に「哲久の魂そのものというべき、悲痛なイメージと、きびしい調べとをもち」とかぎりないオマージュを捧げていたが哲久もまた、「私の一首」として、曼珠沙華の一首を選んで

いた。そして

八夢の昏みには、現実の根がわだかまり、命の核が沈んでいる。

夢をみてかなしむことは、むかしもいまも変わりがない。時に落涙のことなどあって、あさましい次第なのだ。

これは三十余年前の夢の歌。いわゆる「支那事変」という侵略戦の只中、多くの若者たちが、大陸の山野に血を流しつつあった時期で、この身もいっぴきの餓狼にちがひなく、心身ともに病み憑かれていた。そのときのやる方なき無残の想いが、この歌の背後に揺曳しているのであるか。うち摧かれて滅びゆくのは、曼珠沙華か、はたまた人間の命か。秋、自然凋落のきびしさ、すさまじさは、過現未かけて永劫につづくであろう。三十一字の世界、何程のことがあろうかという。しかし一字が千字万字を表象し、その言々句の織りなす韻きが、広大なる宇宙の無限につながるやも知れぬのだ。

よき文章ゆえながく引用した。まこと歌人とは、一首の中にこのようにすべてを歌いこめるものかと、つくづくとおもひ知らされ、しばし茫然とした。また氏は悲痛に夢の像を追ひ求める歌人も少ない。それはながき闘病生活にも一因はあるのであろうが、むしろ夢こそよりラディカルな言葉、現実にあらずしてより惨たる現実であるのであろう。逆照明をあたえることによって、氏は夢から現実世界を浮き上がらせる。たとえば、

はるかなる戦哭われの病むうつつ夜ふかく白くかせ旋る雪

まどろみの切れぎれにして首縄も手錠もあらぬ怯者のひとり